

武神館伝書



第七号



平成七年 三月一日発行

大小捌き型

現代の武道家の多くはこの大小捌き型、つまり大刀と小刀を帯びたその体術を知る人が少ないようです。この大小捌き型を知って初めて居合術、抜刀術、剣術、撃術、劔法の本質が会得出来るものです。また、無刀捕、真剣白刃捕・白刃止というような真技も体得出来るのです。これを古伝、伝書のまま伝授いたしますが、一型、一技、千変万化、神伝される境地まで修業一貫していただきたいものです。口伝、言葉はロゴスというなわば、これロゴス、神伝に等しと悟（と）いて下さい。来年、一九九六年は劔について指導いたしますので、八法秘劔の極意を得るためにも大小捌き型の極意を得て下さい。

人体の急所と刀の名称

大小捌き型の稽古をするにあたり、高木楊心流の急所をよく知っていただきましょう。図で示してある○印の所が急所なのですが、急所の名称は流儀によって違います。他の流儀の急所の図も参考にして、そして急所を探して下さい。人間の体の構造は同じようですが、急所についても個人差があるものです。ここで紹介する高木楊心流の急所の図は、急所を学ぶ上で切紙許しといって急所について知るための初歩のものです。急所を使用するにあたっては、拳、武器、自然との関係をよく知ることが大切です。

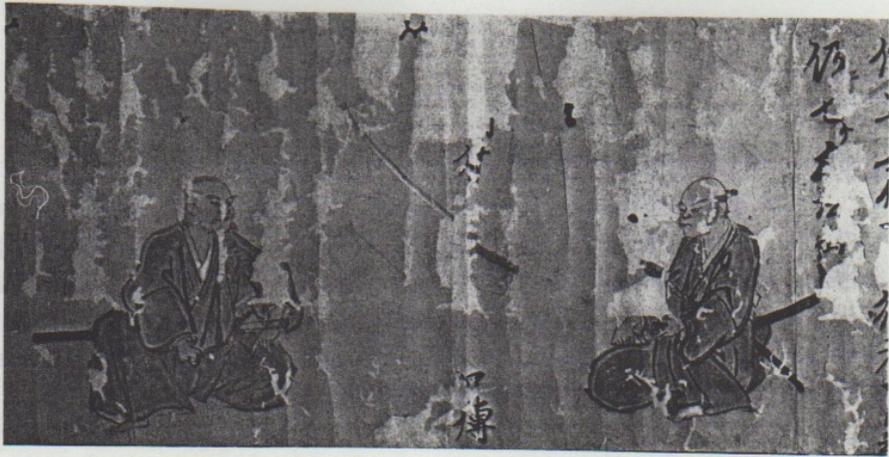
また、刀の名称も覚えておいて下さい。



ありし日の高松先生

山

(1) 楊心流伝書



対座

將承の氏も流承の本人

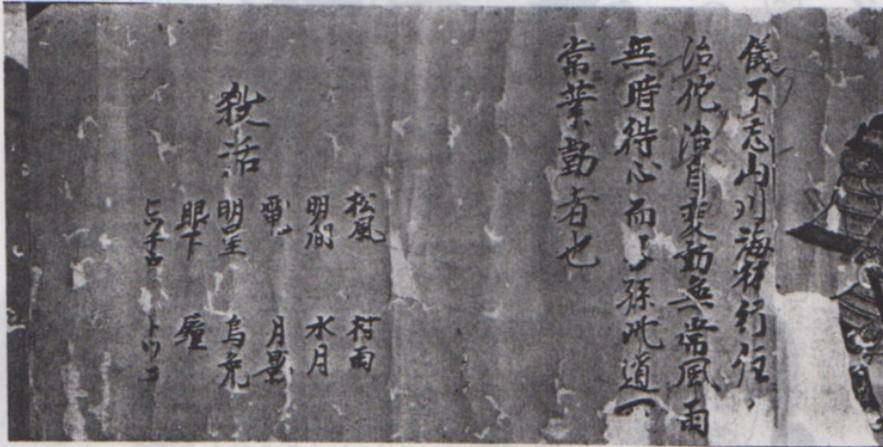
ケ図、とよしき式がノアへ成、とよ承承の流心樹木高、せよぶこる十き古新の壁を剛小大
愈の兼討の討、十き、意ア、とよ承承お神々の酒意、たすアの酒意は酒の印〇るあア「示
酒意、たすア、とよ承承の流の樹人、はる下ア「酒意酒意ア「チ、ア「コキ等々図の酒
(2) 承承酒意、お図の酒意の流心樹木高、十き、承承のよるよるま差人踏よア「コ
おア、とよ承承、お図の酒意の流心樹木高、十き、承承のよるよるま差人踏よア「コ



無刀捌

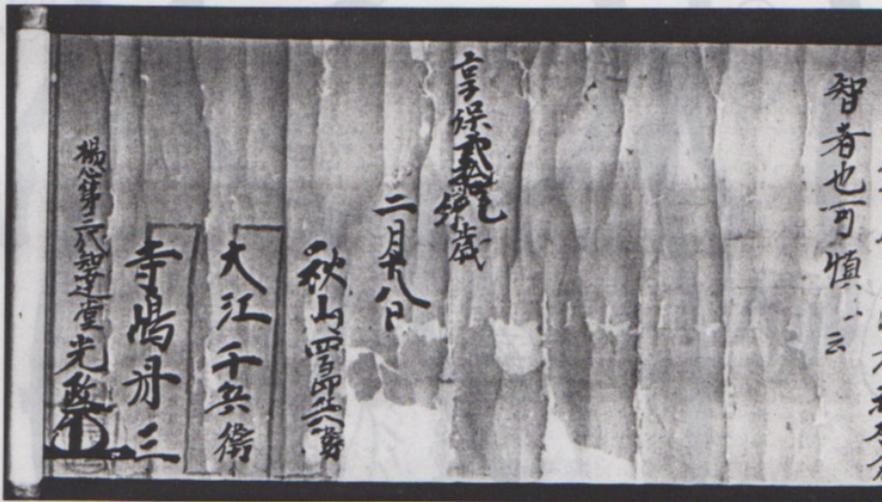
主式對高の日じりあ

(3)



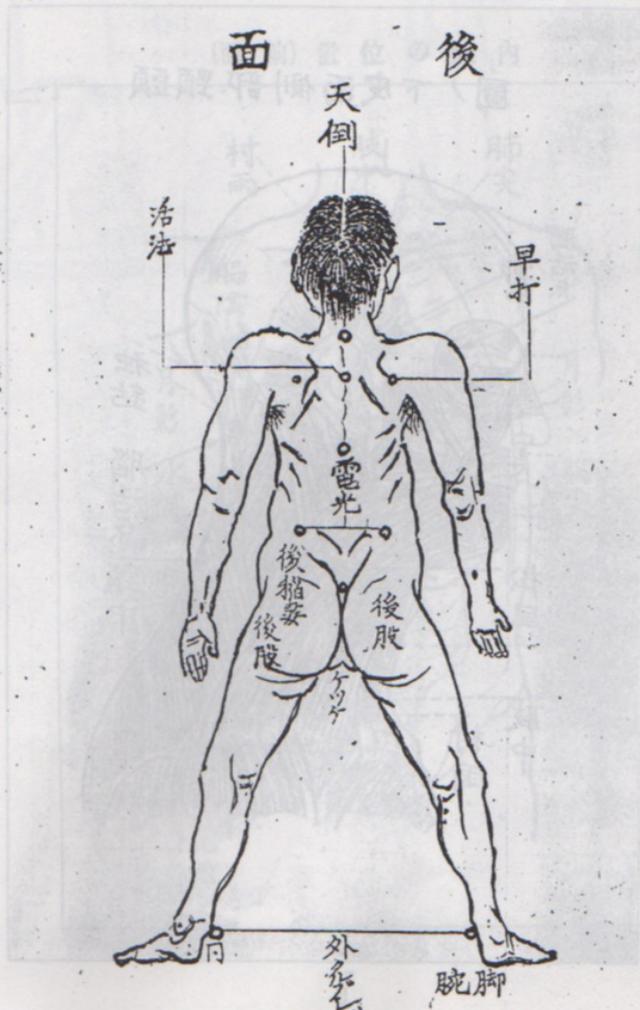
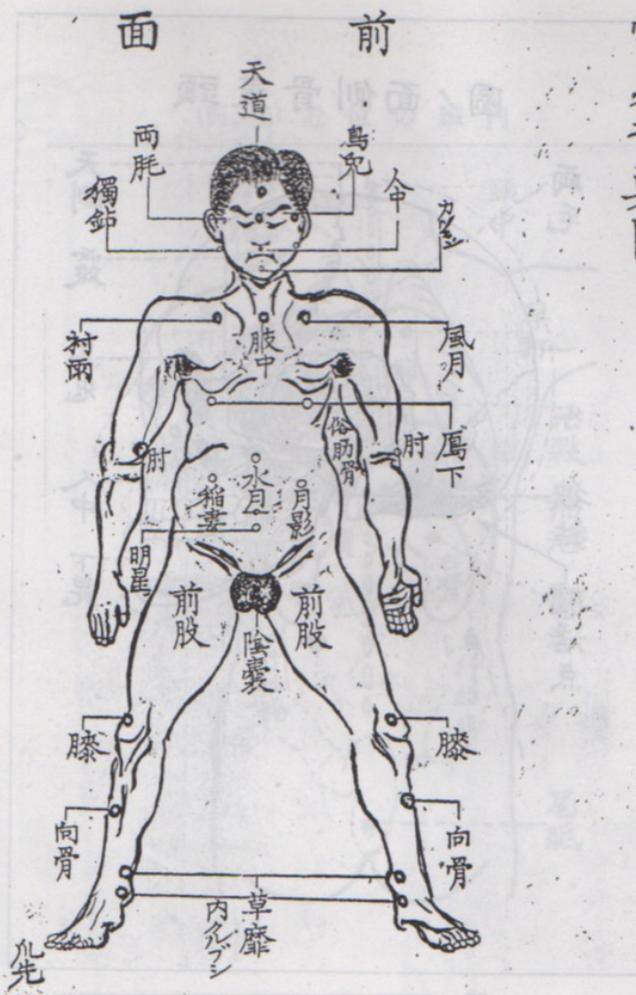
殺活と記されている急所名。急所は当て倒すだけでなく、活法にも用いられ人を生かすための急所でもある。

(4)

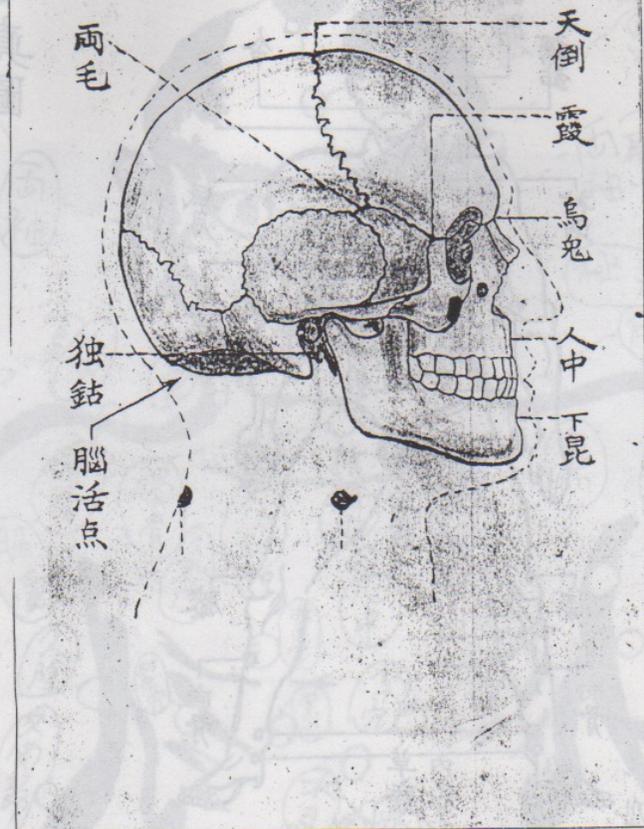


享保二十年に伝承された楊心流の巻物である。約三百年前に描かれたものである。

當身之真圖



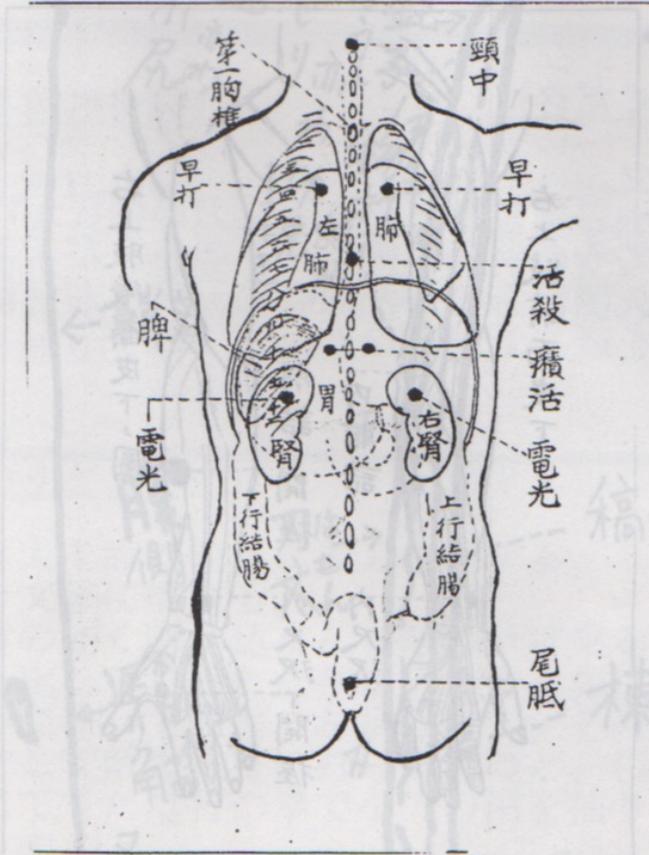
圖ノ面側骨蓋頭



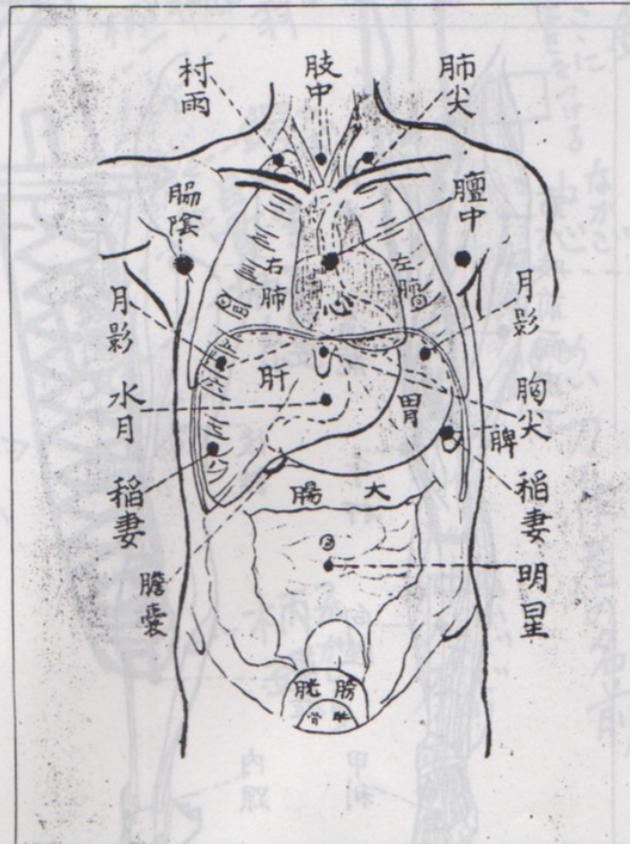
圖ノ下皮面側部頸頭



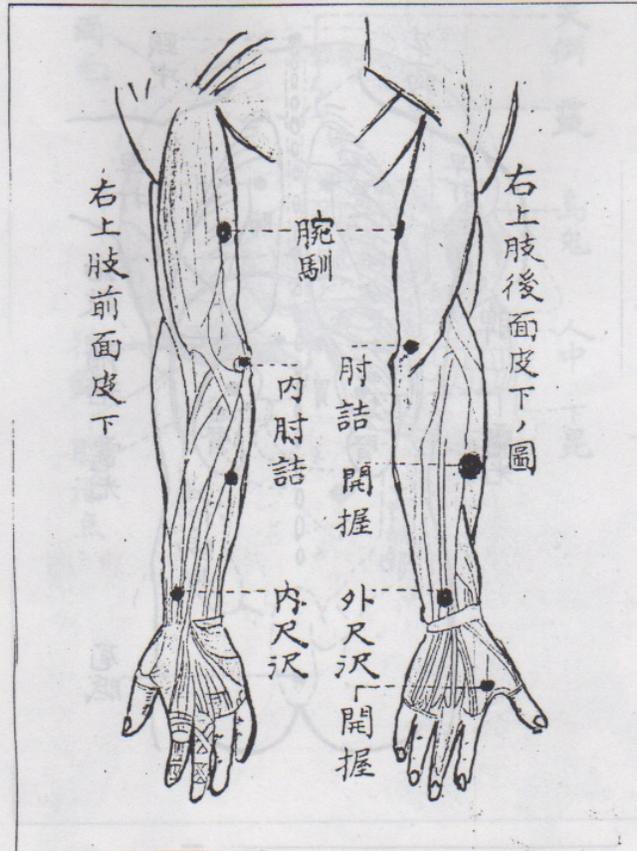
(面後) 置位の臓内



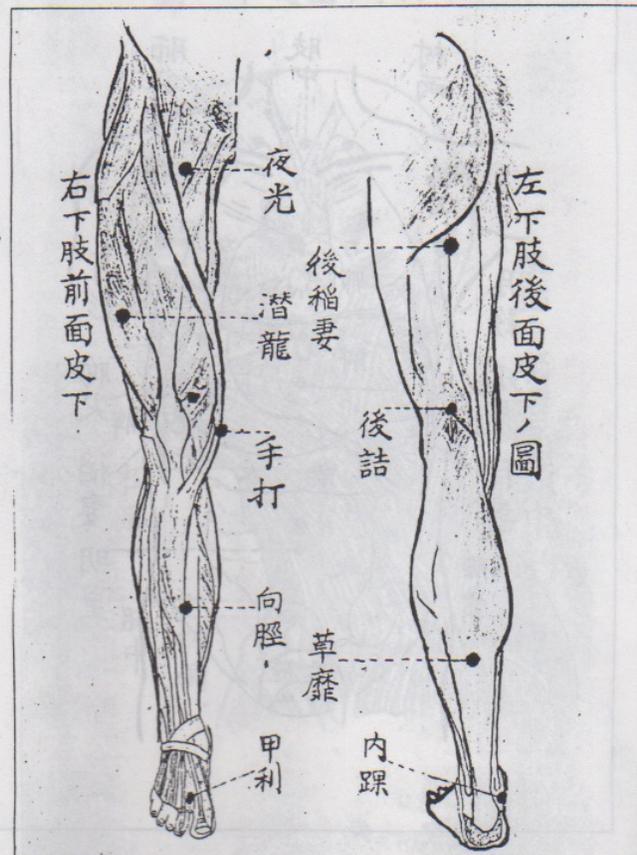
(面前) 置位の臓内



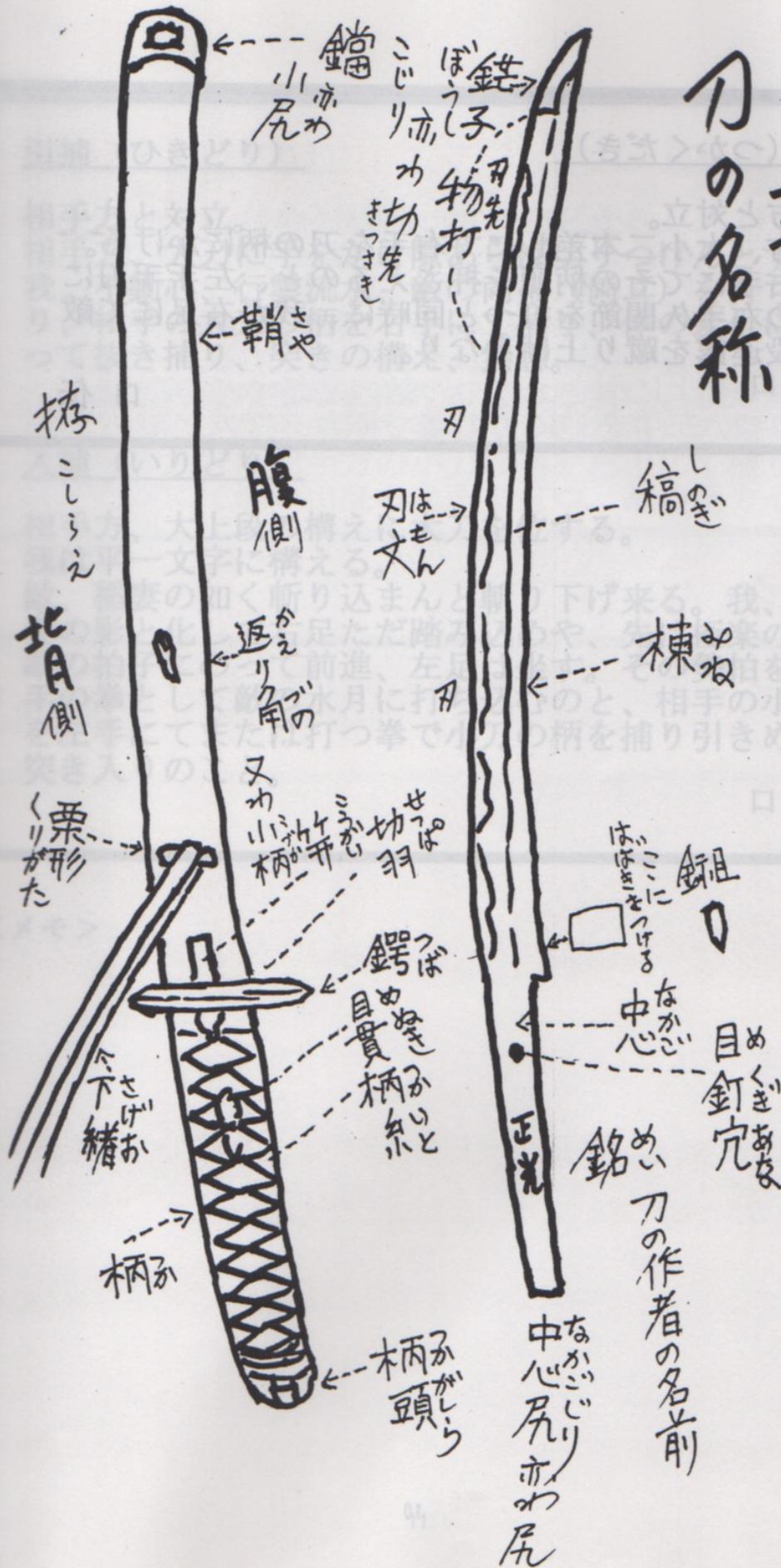
(面後前) 下皮の肢上



(面後前) 下皮の肢下



刀の名称 一般的な

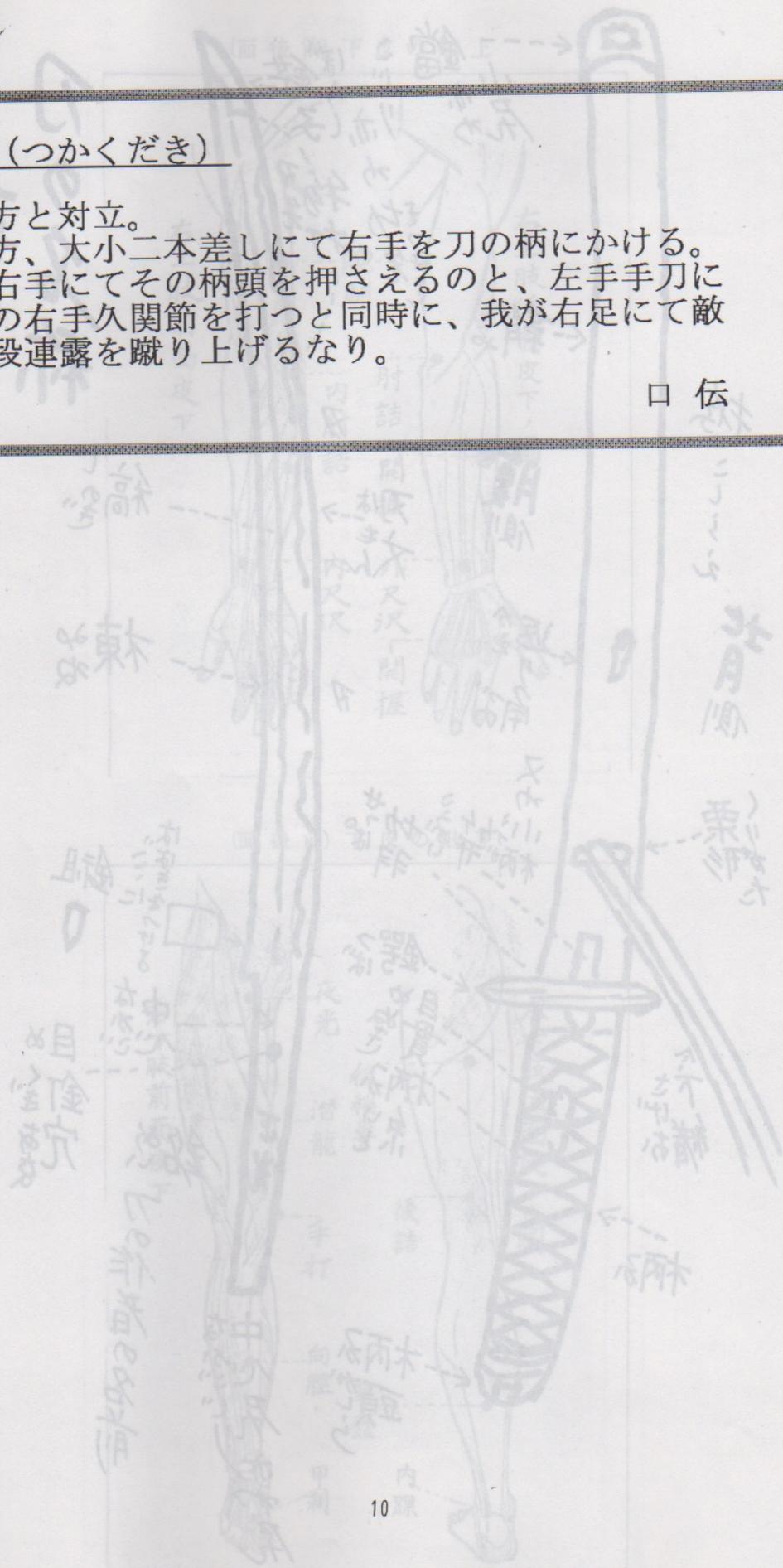


柄碎 (つかくだき)

相手方と対立。
相手方、大小二本差しにて右手を刀の柄にかける。
我、右手にてその柄頭を押さえるのと、左手手刀にて敵の右手久関節を打つと同時に、我が右足にて敵の下段連露を蹴り上げるなり。

口伝

<メモ>



引捕 (ひきどり)

相手方と対立。

相手方、大刀に手をかけ隙あらば切りつけんとする。我、不動心、行雲流水、敵の両袖（両耳）を打ち破り、相手の大刀の柄を右手にて捕り、体の変化によって抜き捕り、突きの構え、無想。

口伝

入捕 (いりどり)

相手方、大上段の構えに大刀を位する。

我は平一文字に構える。

敵、稲妻の如く斬り込まんとして斬り下げ来る。我、稲妻の影と化して右足ただ踏み込めや、先は極楽の古歌の拍子にのって前進、左足は坐す。その勢拍を右手の拳として敵の水月に打ち込むのと、相手の小刀を左手にてまたは打つ拳で小刀の柄を捕り引きめき突き入りのこと。

口伝

<メモ>

掬捕 (すくいどり)

相手方大刀に右手をかけて抜かんとする。
瞬勘 (しゅんかん、この字体を味わうべし....) 我
は我が右足にて敵の小手を蹴り上げる。この際、我
が左軸足の捌きが大切である。また、蹴り様その方
向を会得すべし。故に敵の大刀は鞘から抜き飛び去
る。敵が再度の攻撃をかけんとする前に、我が勢力、
封技、封心、相手の技や勘心 (かんしん) の動く瞬
勘を前知、我は相手方の小刀の柄を左手にて捕り、
我が右拳にて敵の山登の急所を打つ。敵の後方そり
身を利用して小刀を抜き捕り敵を突く、捌き。

口伝

<メモ>

<子々>

柳骨 (りゅうこつ)

相手方、大刀斬り込み来る。この斬り込み方は大上段からの斬り込みだけではない。斬り込みの基本八法ともいい、自然の構えから、流派の構えからの極意とされている構えからの斬り込みと読む。敵の斬り込みに対し我は右足一步後ろに引いて体をかわす。この引き体は丁度弓に矢を番えて引く、このような体捌きが極意である。斬り込みし、敵の大刀は我が体の右側に流れる。この流れる状態を水の流れか、気体の流れか見るべきである、躰(み)るべきと表現しておこう。我は左手にて敵の右小手を掴み我が右腕拳(右腕の拳の数、変化は幾つあるだろうか。これも会得すべき問題である。)にて敵の面部を打ち、俊(才知の優れたこと)時、敵の大刀を捕って敵を横一文字に斬り捨てる。斬り捨て御免(免許の尊敬語)の横一文字斬りともいう。

口伝

<メモ>

掛落 (かけおとし)

相手方、大刀大上段に構える。
我は相手斬り込みの角度に応じて飛び込みつつ、敵の両腕の肘を押し上げる。敵は押し上げる方向に一歩後退する。

我はそれに応じて前進（応進ともいう）、右足の脛（すね - 脛骨部）にて蹴り上げ、蹴り上げの足なるべく敵の両足間の敵の後方に降ろし着地するようにながら、敵の刀の柄頭を我が手で捕って突き上げる。

敵は自分の刀の棟（背）で天頭を打ち倒れる。

口伝

<メモ>

<メモ>

小手止 (こてどめ)

相手方、大刀斬り込み来る。私は右を後左へ開いてかわす。伝書にはかく書き残されている。つまり、我が右足を我が左足の後へと開いてかわす、つまり、右足の捌きの方向を示すものである。敵の大刀は我が体の右横に流れる。この時、敵の大刀の鏢の位置が我が体の右横といっても、どのあたりに位するかということになる。我が左手にて敵の右手を突き放すかに見せつつ、捌気(さばき)とともに我が左手にて敵右手逆捕りにそれを追うようにして、我が右手も敵の右手を追うように捕りつつ、体を一転、我が右手にパワーを移しつつ、我が左足を坐す勢力を利用して敵を投げる。敵の体が空間にある時、我が五躰、五拳による攻撃を会得すべきである。

口伝

<メモ>

横刀 (おうとう)

(めりてこ) 北手小

相手方、大刀に手を掛ける。これは相手方が左手で掛ける場合、右手で掛ける場合がある。流派によっては、また状態に応じ、そんな結果を生むことがある、一つの戦理を読むことである。我は右手にて敵の大刀の柄を上から押さえに行く。敵一步引く。我付け入りの捌き、体変の隠を利用して我が右手の肘の拳で敵の水月を打ち込み、我が左手にて敵の大刀を抜くのと、相手を横に斬り拂うのと同瞬同時のこと。この際、敵の切先と鞘の間隔は紙一枚の厚さ反転のこと。

口伝

<メモ>

<メモ>

口

<子々>

車投 (くるまなげ)

(くるまなげ) 四手

前記、横刀に同じく、我が右肘拳にて水月に当て、次に我が右手を敵の左腰に掛けて横身に倒れ（これは自由方向に横身に倒れる練習を要す。）我は横車返しに行く。その捌きの流れの間我が左手は敵の大刀の柄を握っているために敵の刀は我が手にある。我一転廻、起き上がりつつ、その反動時の力で敵に斬り込みのこと。

口伝

<メモ>

<子々>

四ツ手刀 (よつでとう)

(やぶまる) 兇車

相手方、大刀に手を掛ける。我、我が右手にて敵の大刀の柄を押さえる。この際、我が右手、躰ともに我が左手の動きを敵に感知させることもなく、我が左手影の如く浮かしておくこと。我は我が右足にて敵の強經の急所を強く踏みつける。敵は驚気、気散す、気逃ともいう。敵はしかる故に足を逃足にして引くを利用して我は左手にて敵の小刀を抜き捕り、小刀切先と敵の鞘口の呼吸の中で敵に突き入ること。

一枚の厚さ反転のこと。

口伝

<メモ>

<メモ>

刃結 (はむすび)

相手方、大刀に手を掛ける。
 我は右手小刀の柄に手をもって握り、大刀の鐔もと
 を押さえる。
 敵は一步引く。我付入りて忽ち小刀を抜き、この抜
 刀法に口伝多く有り、筆絶の体捌きなり。
 我、抜きし小刀にて敵を横一文字、九字、小刀居合
 の始めとし、斬り込む。

口伝

<メモ>

武神館では本部道場の設立を含めた幾つかのことが今後3年ほどで実現される。行っているこの偉大な活動は武神館を世界的規模の活動として成長させることである。近い将来、世界中にいる士道師達が彼等なりに活動していき、互いに助け合おうとするようになるだろうとお考えになっているからだ。先生のこのような考えは、国籍や個人を超えて武神館の一員である意識を強めてきた大会の存在を思い出させる。大会について初見先生は、すべての士道師はここ数回の初見先生海外ご訪問の際に得た機会すべてを良い機会として打ち出してほしいとお考えになっている。大会を開く際は前もって、遅くとも1年位前から計画をスタートさせ、その近隣の地域から出来る限り多くの武神館のメンバーを大会に関与させなければならない。大会は一個人やある団体だけの仕事としてとらえられてはならないと先生は強調する。士道師だけでなく出来る限り多くの人々が知り、皆がより一層強く武神館の一員であることを意識し、武神館コミュニティが発展していくためのものにしなければならないのだ。今後宗家では大会はこの地域で行われると示唆するだけになるだろう。

この「山脈」もまた世界中に真の武道を広げていく過程としてとても重要なものである。従来のように「山脈」は初見先生の生きた技の伝承として書かれている。ここで書かれていることは先生の著書やビデオに沿っていて、初見先生の「精神」を理解する上で非常に貴重な参考になっている。私達、つまり可能な限り多くの、現在の、そして過去、未来の武神館メンバーはこの「山脈」を手にし、読むべきだろう。たとえ真の武道に背を向け、武神館を去って行った人達も、これを読むことによって再び武神館に戻ってくるであろうと、初見先生はお考えになっている。

もちろん、初見先生の武道の精神を掴む最良の方法は日本へ行き、先生と共にトレーニングをすることだろう。たとえ高度な技を身に付けた高段者でも、先生の指導をまったく受けずにトレーニングを重ねれば、いつか真な方向へ行ってしまうだろうと初見先生はおっしゃった。とくに初心者でもなく、ある程度のレベルまで達した者ならそれはなおさらであろう。そのためにも、本部道場にともなった手頃な宿泊施設を完備し、世界中からやって来る人達を助長することは必要になるだろう。世界中に広がり、成長している武神館だからこそこの様な施設が必要になってくるのだ。初見先生とトレーニングすることは、世界中にいる武神館武道を志す人々にとっては最高のトレーニング方法だ。

千龍の門一樹直誠特苑

透捕 (すかしどり)

相手方、大上段 (口伝)、斬り込まんとす。
斬る。空。
我、左体を開いて (平いて) かわす。
敵、横一文字に斬り込む。空を斬らせる。
我、後方に飛び退り、忽ち変化、躰虚実に変化のこととして飛び込む、ただ踏み込めや。先は極楽の拍子にのって、我が右手拳敵の水月を当て.... 敵のひるみ体を逃さず、我腰投げにて極めるなり。
腰投げは必ず敵立たざること。腰投げの法、よくよく修得すべきことなり。大小を利して腰投げ捌きの法に熟達のこと。

口伝

<メモ>

平成七年二月十一日

初見良昭 寿宗

伝
武神館道場一門の諸子

武道を学ぶ者

ロバート・マトソン、6段

日本への旅、そして宗家会長である初見良昭先生とのトレーニングは常に「死」と「再生」の繰り返しだった。それは時差ぼけや、カルチャーショックをも越えたところにあった。初見先生の「精神」に触れることは、古い考えややり方を排除し、真の武道に対して心を開くことでもあった。これは日本へ来るたびに感じさせられることだが、では、なぜそうなのか。今回の旅を通してこのことに触れてみたい。

今回の日本でのトレーニングで初見先生は先生ご自身の技やそのスタイル、その起源、また武神館の今後、とりわけ数年後に起こりうる変化について話す時間を今まで以上に設けて下さった。通常の1時間半のトレーニングは、忍者の歴史的な遺産から大会開催に関する心構えにまでわたるオープンで率直な意見交換をも交えた3~4時間の白熱したものとなった。

武神館では本部道場の設立を含めた幾つかのことが今後3年以内に計画されている。初見先生が国内で行っているこの偉大な活動は武神館を世界的規模の活動として成長させることができるほどのものである。近い将来、世界中にいる士道師達が彼等なりに活動していきただけの力をつけ、士道師会を通じ、互いに助け合って武神館武道への理解を深めることができるようになるだろうとお考えになっているからだ。先生のこのような考えは、国籍や個人を越えて武神館の一員である意識を強めてきた大会の存在を思い出させる。

大会について初見先生は、すべての士道師はここ数回の初見先生海外ご訪問の際に得た利点すべてを良い成果として打ち出してほしいとお考えになっている。大会を開く際は前もって、遅くとも1年位前から計画をスタートさせ、その近隣の地域から出来る限り多くの武神館のメンバーを大会に関与させなければならない。大会は一個人やある団体だけの仕事としてとらえられてはならないと先生は強調する。士道師だけでなく出来る限り多くの人々が関り、皆がより一層強く武神館の一員であることを意識し、武神館コミュニティが発展していくためのものにしなければならないのだ。今後宗家では大会はこの地域で行われると示唆するだけになるだろう。

この「山脈」もまた世界中に真の武道を広げていく過程としてとても重要なものである。伝承のように「山脈」は初見先生の生きた技の伝承として書かれている。ここで書かれていることは先生の著書やビデオに沿っていて、初見先生の「精神」を理解する上で非常に貴重な参考になっている。私達、つまり可能な限り多くの、現在の、そして過去、未来の武神館メンバーはこの「山脈」を手にし、読むべきだろう。たとえ真の武道に背を向け、武神館を去って行った人達も、これを読むことによって再び武神館に戻ってくるであろうと、初見先生はお考えになっている。

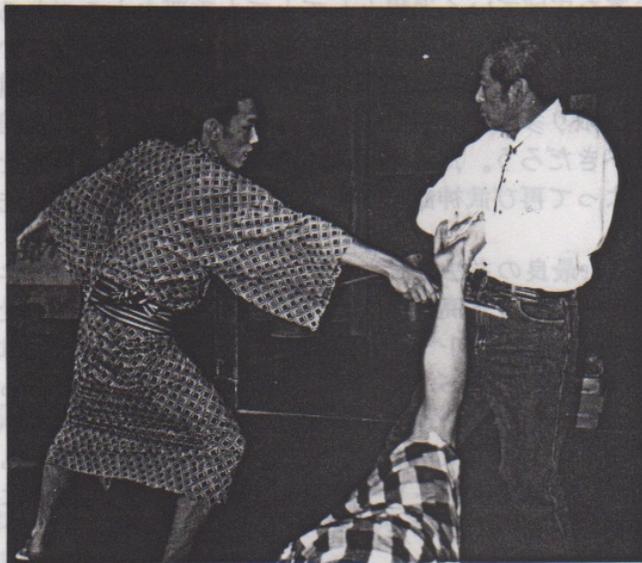
もちろん、初見先生の武道の精神を掴む最良の方法は日本へ行き、先生と共にトレーニングをすることだろう。たとえ高度な技を身に付けた高段者でも、先生の指導をまったく受けずにトレーニングを重ねれば、いつか異なった方向へ行ってしまうだろうと初見先生はおっしゃった。とくに初心者でもなく、ある程度のレベルまで達した者ならそれはなおさらであろう。そのためにも、本部道場にともなった手頃な宿泊施設を完成させれば、日本へやってくる人達を助長することになるだろう。世界中に広がり、成長している武神館だからこその様な施設が必要になってくるのだ。初見先生とトレーニングすることは、世界中にいる武神館武道を志す人々にとっては最高のトレーニング方法だ。

先生の計り知れないエナジーは、先生に触発されたすべての人にとって、またこの危険な世の中において、真の武道の「本質」をもたらしていく。先生は常に武術は善の心を持つ人々にとって、うまく作用していくものになるとおっしゃっている。そのためには忍者の持つ「隠密行動をする影」としての部分や古い考え方を排除し、新しい武神世代を明るい方向へ導いていくべきなのだ。

初見先生のめざすゴールは権力やお金のための「帝国」を造ることではなく、よりよい世界を造って行くための積極的で好意的なものである。先生は何度か暴力によって人の価値を破壊してしまった国や宗教について話された。先生は武神館の「精神」や「技」を広めることがこの意味のない暴力を減少させる助けになるとお考えになっている。私達は家族や地域社会や自分達自身を守れるくらいに強くならなければいけない。強くなるとはいつでも、それは暴力に対し、暴力で反撃したり、相手を陥れたりするためではない。たとえ自分や家族を守るために武術を使うことになっても、決して紳士的な善の気持ちを忘れてはいけないということである。小刀に対抗した素手による防御でさえも、その気持ちを忘れてはならないと先生はおっしゃる。しかし、実戦においては別な形で注意しなければならない。つまり、どんなに凶悪なまたは暴力的と思われる者を相手にした時でも、それから身を守るだけの武術を使いながらも善の気持ちを忘れてはいけないのだ。先生は武道においてこの気持ちを忘れてしまえば、ギャングと同じどころか、戦う前にしてすでに敗北してしまうという。なぜなら暴力自体すでに私達の心を腐敗させてしまうものだからだ。

初見先生の端麗な言葉の数々は先生の動きの中すべてに反映されている。紳士的（善）な様子とその素晴らしい力とのコンビネーションを通じて、言葉なくとも先生の考えははっきりと伝わってくる。痛みを伴う「プレゼント」、つまり体で痛みを感じながら覚えた数々のことと同じくらい、限界なく力を供給し続ける先生は寛大に私達の体術を進歩させるべく導いて下さる。かなり長い間トレーニングを続けてきた人でさえ、やはり先生とのトレーニングの素晴らしさには改めて驚かされている。先生は多くの者がトレーニングのためにわざわざ日本へ来るということに対してなんら疑問を抱いてはいない。大会は素晴らしいものではあるが、日本での宗家とのトレーニングに代用できるものではないからだ。特にこの時期、武神館に起こる様々な変化や計画を前にして、また初見良昭先生の素晴らしい技や精神に触れるために、私自身毎年日本に来ないわけにはいかなくなっている。

山彦



一つの道を極める方法論として色々な型がありますが、旧ソビエトの俳優であり演出家でもあったスタニスラフスキー（1863～1938年）が語ったお話を参考にしてみよう：

「私の考えでは、芝居には一つの大きな道があって、それを我々はみんなコツコツと歩いているのです。しかし、芝居道の両側には目に媚びる色気のある花が咲いているものです。

東京芸術座「赤ひげ」の舞台稽古、指導中の宗家

その花に誘惑されて横道にそれる人があります。右の花咲く森へ、左の花咲く山へ、そしてその花の艶やかさ、香りに包まれる森や山へ踏み込んでしまうものです。いつの間にか本道から遠く離れた所にたずんでしまうのですね、坐ってしまうのですね、眠ってしまうのですね。彼等はまだ本道へ帰って来ません。けれども本道から離れ左右の森や山へ踏み込んだとしても、我々は思い返し、一つの本道に帰り歩き続けなくてはならないということが本当だと思いますね」と語っています。このお話しは我々が歩む武風道にも通じるものがありますね。武風の本道から知らず知らず外れている行為・行動が自覚されない時があるということ、道場に来た時、本道を発見することです。道場とは、稽古する所というよりは、本道に居続ける歩き続けることが出来るよう安心立命の道の場と思うべきでしょう。

次に芸の型と心について語っております。「歌舞伎の型は大変美しいものだと聞いておりますが、この頃のロシアの芝居も大分型に気を付けて来るようになりましたが、あまり形に気を付けて形に流されはしないかと心配するほどです。芝居では心も形も共に大切なものですが、私の考えではどうしても心が第一で形は二の次だと思います。」初心者は何の道でも形（武道的に構え）、そして構えの連続の技術から無心に入る、そのために無心に入るための自我の忘却の瞬間の流れへの心構えが本道で鍛えコツコツと歩くことにもなるのです。コツコツ歩いていけば、一例をあげると、骨骨と骨法術の極意を得んということになるのです。

右の写真の左団次さんは、歌舞伎芸人の芸道の年輪の一つとして歌舞伎芸の成人式は六十才だと語られております。私と左団次さんが並んで坐っておりますが、左団次さんはもともと大きい方ですが、非常に大きく舞台風の姿で坐っていらっしゃいますね。歌舞伎の俳優さんは荒事を演ずる時観客に対し自分を大きく見せるための工夫の上で演じております。我々の武芸、特に真剣型ではなるべく見えないような映像というより、影を作らなくてはいけないのですが、映画やお芝居また演武を演じる時は、観客の眼と耳から心に当身を入れなくては、観客を感動させることが出来ないという方程式を知ることです。即ち、虚空という空間にスクリーンをもたらす必要があるからです。



歌舞伎俳優の市川左団次さんと

一般的にいう成人式は二十才なのですが、芸界では六十才が成人式だという芸間の時差があります。武芸にあってもこの時差を忘れてはいけません。

虚実

— ジャック・ホーバン君からの手紙 —

初見先生へ

今年は「虚実」を特別に力を入れて学びたいと思っています。そう決めた訳は、実は私の新しい仕事は医療保険業界なのですが、どうもこの業界では私の個性は強すぎて、人によっては私が攻撃的すぎる人間と取る人がいるのです。もちろん、私の武人的性格は変えることはできませんし、今まではむしろその本性を隠すことは不正直なことだし、また隠そうとすれば武人らしさが薄れてしまうと思っていました。でも、このような考え方は馬鹿げていると思うようになりました。これからはどうやって隠すかを学ばねばなりません。この修業によって私はもっと幸せな人間になれると思います。

このような人生に対する洞察は「山脈No.4」の高松先生の「もし、この虚実に気付かなかつたら、私は”正直”と”勇敢”という、単なる二つの言葉によって生き続けていただろう。その結果、私は間違った、馬鹿な人生を送っていたかもしれない」という言葉から得ました。この概念「虚実」に関して、ぜひ初見先生ご自身の個人的なお考えもお聞かせ頂きたいです。どうぞお願い致します。

ジャック・ホーバン



ジャック・ホーバン士師とニューヨークの若き武神館の獅子（嗣子）達、アトランタ大会にて

「士師の諺について語ろう。士師とはイスラエルでその王国成立前、ヨシユア以後、サムエル時迄（紀元前1200年頃～紀元前1000年頃）、国難の際に民衆の指導者となった者達をいう。」

山彦

「虚実」についてのお答え

山脈四号に紹介されている高松先生のいわれる虚実観を見たジャック・ホーバン君から「今年は虚実について特別に力を入れて学びたいと思っています。初見先生の個人的なお考えもお聞かせ頂きたいです」というお便りを頂きましたので、早速お答えすることにいたしました。

「虚実について武道的に説明しますと、何か駆け引きだけのようになってしまう。辞書では虚実について次のように解いております： 無いことと有ること、空虚と充実、嘘と誠、防備の有無、種々の策略を用いること等…」私はそこでこれを医学的、自然的に見て、虚実の本質について説いてみましょう。人間は酸素を吸って炭酸ガスを吐いて生きています、動脈血と静脈血が働いて生きています、交感神経と副交感神経の拮抗作用によって生きています。夜の夢、眠りが「静」とすれば、目覚めの「動」があり、昼と夜、太陽と月星、これらの虚実が人間を生かしているのです。これらは生命を守り健康を保ち生きるための作用で、この作用はバランスの良いリズムがないといけないのです。

武神館の生きるテーマは、人間社会や自然界を生きるための虚実の真理を武道を修業することによって把握する方法を、かんじんかなめ、神心神眼と説いております。虚実は人生を生きる道の歩味（あゆみ）、その詞韻と思って下さい。大光明も電極のプラス（+）とマイナス（-）があつてそこで光が輝くのです。

江戸時代に近松門左衛門という戯曲作家が、お芝居を楽しく見せるためにお芝居の骨法を「虚実皮膜」といっております。この言葉の意味は、芝居は本当のことばかり描いていると芝居にならないし、そうかと言って嘘ばかりでは観客に見破られる、だから本当と嘘の中間が面白いんだという意味です。武道的に虚実皮膜を妙変すれば、虚実秘巻へと一変、龍虎一巻の極意を会得するということになるのです。

正しき道を見つける

スヴェネリック・ボグセター、十段



1993年フランス大会
スヴェネリック・ボグセター、
十段

「正しい道を見つけなさい」と宗家が1994年4月のある、記憶に残る日に言いました。4月2日、即ち宗家の師高松寿嗣先生の命日です。素晴らしい武道稽古の中で宗家は私達に物理的な動きと共に深い奥義を教えていました。その日に宗教や正義、愛、平和、人生そのものについて重要なことがたくさん話されました。中でも、私の潜在意識にへばりついてその中で眠り込んだのは例の「正しい道を見つける」という言葉です。その言葉は時々目を覚ますように顕在意識まで出てきて、毎回毎回私に何か新しいことを語りかけ、武道の目的を考える理由を与えてくれました。この短い文章で私は私の考えている「武道家にとっての正しい道」を皆さんに分けようと思います。

武道を本当に学ぶことは生き方を集中的に勉強することに繋がります。しかしあいにく現在の武道の稽古は（少なくとも西洋では）、自分の力で脚光を浴び、自己満足するような人をたくさん引き寄せるように、武道の意味の外側しか認めないところが多いのです。普段このような稽古ではエンターテインメントや単なるショーを超越できないのです。西洋の武道界では今この姿勢がもっとも一般的で、恰好ばかり見せつけ、人を驚かせるための派手な格闘技で自分の法螺を吹きます。気配りや慈悲、愛を育てることなどは完全に忘れられています。これではマーシャル・アーツのいわゆる「芸術性」は名ばかりになってしまいます。

本当の武道を求めている者は暗闇の中で迷う可能性が高いのです。本当の武道から遠く離れたところで、独りで恰好や外側を吸収し、自分の本質の中心で生きることにはできないのです。武道の本質が分かると、本当の教えはどんな小さな生き物をも軽蔑したり、痛めたり、破壊したりすることを禁じているということをはっきり認識してきます。ほかの人間の命を奪うことなどもつてのほかです。何世紀にも渡り、倫理や道徳、正しい生き方を中心とするシステムまで進化した武道が今日そのままでなく、ものを破壊するための技や喧嘩のトリックとして使われるのは現時代の皮肉なのでしょう。

稽古の過程の中で、ある時点で選択の岐路に立つことがあると思います。自分のエゴの暗闇の中へ飛び込み、名人の振りをするのか、それとも開放された、命の鼓動に満ちた心で宇宙の光へ自分を開くのかという選択です。どのように稽古してきたのかによるでしょう。追求

されるのは闘う技やその名前いくつかではなく、自分の心を生き方の本質に開くことでなければなりません。門人として稽古している間受ける技は先生が貸してくれる基本的な情報に過ぎないということを念頭に置かなければなりません。自分の技ではなく、借りたものです。借りた技は無知の材料で、他人を真似する間はそれが続きます。稽古の初期の段階ではこういう進展も必要です。しかし他人から借りるということにも限界があります。方法が真似をすることだとしたら、その結果も偽物です。心から新鮮なものは何も咲いてはきません。借りたものや自分の恐怖、欲望を超越し、本当の智慧、即ち知識を越えた直感的な心の智慧まで行くことも覚えなければなりません。そのような時が来れば、何かが起こります。この「何か」は理屈や論理から生じるものではありません。調和した人生を送っているときのみこの生きている「何か」が起こり得るのです。本当の智慧を求め真の探求者を目指すのなら、時間が必要です。開いた心を持つこと、負けを認めること、そしてエゴを中心としたレベルを越えることを学ばなくてはなりません。さもなければ最初からその道を歩まない方が良いのです。道が曲がり迷子になります。

大事なのは言葉や概念よりも心と頭の合一です。頭はよく心に惑わされます。古い諺にありますが、「心には理屈では知れない理屈がある。」私はこれが本当だと思います。変に聞こえたり、非論理的に思われるかもしれませんが、本当の智慧は知識に満ちた頭や優れた論理によるものではありません。本当の智慧は心から来るものです。正しい生き方、正しい理解を中心に置けば、自分から求めなくても欲しいものは手に入ります。わざとらしい芸術では本当の芸術は生まれません。本当の芸術は精神や目的のないものに基づき、条件はありません。大気のように自由です。しかしこれは人に話したり、伝えたり、言葉だけで表すことはできません。この道を歩もうと思えば、武道の勉強や稽古に満ちた時代を通し、師から弟子に伝えられた洞察力を吸収しなければなりません。武神館には幸運にも山脈という、宗家や彼が継承した9つの流派と何百人もの宗家からの直伝があります。これは誇りに思い、守らなくてはならないものです。

本当の道は義務の道でもあります。宗家が以前山脈にも書いたように、「人間は正しく生きるためには規律を守らなくてははいけません。」そして道場の掟を5つ伝えてくれました。この掟の重用性は昔も今も変わりません。自分の周りを見渡せば分かるはずですが、どこを見ても貧乏な人、家のない人、暴力が目に入ります。真昼でも老人に対する攻撃や色々な形での暴力は起こっています。我々武道を稽古している者は自分の幻覚、名声やお金を追うことはできません。常時自分達の責任、義務を果たさなければなりません。鏡の家の中の囚人のようになってはいけません。これを実行しても終わりではありません。個人的成長や精神的変化の終わりのない過程の始まりだけです。本当の道を見つけるためには先ず固執、偏見、自己中心、そして食欲を捨てなければなりません。何よりも、体・心・精神は別なものであるという破壊的概念を捨てなければなりません。そして洞察力が湧き出る空虚を見つけ、自分の中で体・心・精神が共に踊っているところに行かなければなりません。この過程には論理は関係ありません。基本的な現実はいつも論理の枠の外側に顕現するのです。この道に入

「瞑想し、観察し、知ることができたら、
いつまでも修行家にも教師家にもならない」

れば、世界を違う目で見ることが初めてできるようになります。心が外面的圧力・内面的圧力から完全に開放された瞬間、一般的なやり方や力比べといったゲームに捕われることもないということに気がつきます。本当に何も欲しているものがなくなったら、日常の活動との有意義な関連性を経験できます。これが武道の本当のミステリーだと思います。

本当の道は逆戻りはできません。一度本当の道に足を踏み入れたら最後まで追っていかねばなりません。極楽を創る心は地獄を創る心と同じです。誤解や混乱の因（もと）はすべて自分自身なのです。この道には初見先生を含み、深い理解および洞察力を持った数百人の宗家がガイドやヘルパーとして立っています。そのため、山脈を通して得る直伝は開いた、かつ暖かく歓迎する心で真面目に受け取らなければなりません。このような心構えで伝書を読めば、その伝書は我々が皆武道の正しい道、本当の道、生き方を見つけるための良いガイドやヘルパーになってくれるのです。

もう分かっていただけだと思いますが、私のいう本当の道とは千技の道や格闘技を主としたファイティングではありません。私は西洋で残念にも広まってしまった武道観、即ち力が致命的な武器で敵を倒すという考え方には賛成しません。私にとっての本当の武道は単に人生を正しく生き、より高い存在を目指すことです。私はこの洞察力を武神館の武風を通していただきました。永遠にありがたいものです。

最後に孫子が昔書いた言葉を引用したいと思います。これは読者の中で、武道の本質はテクニックであり数多い型や技であるという幻覚の下（もと）に生きている人達全員に言いたいことです。そして基本八法の価値が分かっていない（もしくは分かっていると思っている）人達にも、常に新しい型や新しく複雑な技が必要だと感じている人達にもです。そして最後に自分が高度なレベルに達したと思っている人達にです。

「音は5つだけだが、曲は無数にある。原色は5つだけだが、その組み合わせは無限にある。味は5つだけだが、混ぜると終わりが無いほどバラエティに富んでいる。戦いで標準と特別と、力は2つだけだが、その組み合わせは無限でそれがすべて分かる人はいない。」

我々の信条や信頼が成長したレベルまでいくと、隠されていた目が突然に開くのです。内面を見て、最初からそこにあったものを見ると、無と思っていたものが実際に教えの真の本質であったということを感じることができるようになります。宗家があの日、「正しい道を見つけなさい」という短い言葉を言ったとき、私は特に気にも止めませんでした。その瞬間は特に意味はなかったのです。しかし潜在意識のどこかでは徐々に伸びはじめ、時間が経ち私の隠されていた目を開け、武道家の正しい道を見せてくれるに至りました。本当に目が覚めたのです！そして私はその道を最後まで歩むことをここで誓います。

初見先生に 美とエネルギー

彼には自然な美が備わっている
だが絶えず動いているエネルギーに活かされている

いい言葉を説く、平和を夢見る
と同時に、殺す力を持っている
蒙古のステップの青い狼と同じ様に

錨のように地面に埋め込んだ彼の足は
不動で見識があるように思わせる
だが優美な雌鹿の如く
躲しながら器用に飛ぶ

彼の身体は天と地を結ぶ
真如の内臓から迸る不可視の糸は
彼を通り星まで辿る

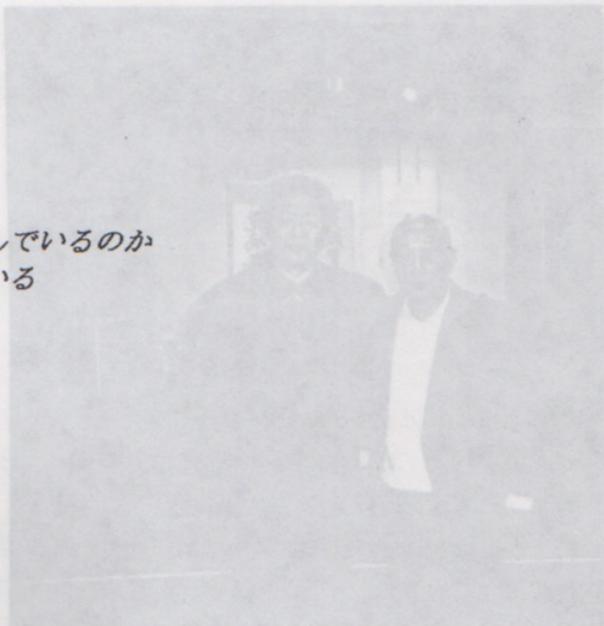
唇には永遠の笑い
若さの泉の水が流れる彼の眼
時代や商人の存在から遠く離れた人である

彼は摩訶不可思議である
東洋の智慧に満ちた人
彼は戦争の狂気が隠した
先祖代々の芸術の軌道である

彼は自然な美とエネルギーである
彼は生きた宝、模範である
彼の中にどれだけ豊かさや真実が潜んでいるのか
彼の謙遜のカーテンの後ろに隠れている

私達の知らないことを知っている
力を抜く力を持っている
自分の智慧と沈着を伝達する
だからこそ強いのだ
億万兆者や大統領達よりも

彼は美とエネルギーである
皆それが欲しい



私は初見先生にキプリングのこの言葉が当てはまるのではないかと思います：

「瞑想し、観察し、知ることができたら、
いつまでも懐疑家にも破壊家にもならない」

宗家、平成七年二月十一日、日本建国の日、全日本刀道連盟会長 中澤 敏氏より、刀道範士の称号を受ける。

第十一号
初見良昭殿
刀道
範士
右授興する
平成七年二月十一日
全日本刀道連盟
会長 中澤 敏



至誠館道場にて
中澤 敏会長と宗家

山脈は；

- 1) 武神館の武道を知るためのものであり；
- 2) 世界に存在する武神館の武友とのコミュニティを計るためのものであり；
- 3) 世界を知るためのものであり；
- 4) 武神館のメンバーとは限らず、たくさんの人に読んでいただくためのものであり；
- 5) 現在、山脈ネットワークは世界二十ヶ国に支局があり、各国語に翻訳された読み易い雑誌になっています。

購読を御希望される方は最寄りの支局にお問い合わせ下さい。

For more information, contact the Talkai organisar

Mariette van der Vliet, Shidoshi 
Duistervoordseweg 27
7391 CA Twello
HOLLAND

You are also welcome to phone
+(0)5712 - 75732

Bujinkan
TAIKAI

Holland 16-17-18 May 1996

Next year, 1996, Dr. Masaaki Hatsumi comes for the first time to the Netherlands for holding the Taikai.

1996 will be the last year Dr. Hatsumi holds a Taikai, and the main theme will be Taijutsu and Bikenjutsu.

The Taikai will be at an international conference resort, 20 minutes from the centre of Amsterdam, 5 minutes from the sea and 20 minutes from Schiphol, our international airport.

The Taikai starts at Thursday May 15, Ascension day, and ends at Saturday with a real Dutch buffet and party with live music.

Don't miss this opportunity to see and learn from our Soke, it is the last year that he will come to Europe.

The price of this Taikai is only 850 guilders and this includes 3 nights hotel, on Thursday, Friday and Saturday, on base of a double room. Breakfast on Friday, Saturday and Sunday. Training for 5 hours per day, lunch on Friday and Saturday. And the final-party, including buffet at Saturday evening.

For more information, contact the Taikai organisar

Mariette van der Vliet, Shidoshi 
Duistervoordseweg 27
7391 CA Twello
HOLLAND

You are also welcome to phone
+(0)5712 - 75732

山脈 SANMYAKU

Head Office - Bujinkan Dojo Honbu, 636 Noda, Noda-Shi, Chiba-Ken 〒278, JAPAN.
Tel. +(0)471-22-2020 Fax. +(0)471-23-6227

UNITED KINGDOM

Peter King
108 Godstone Road
Purley, Croydon
Surrey, CR8 2DE
United Kingdom

PORTUGAL

Ernani Pinto Bastos
P.O. Box 99
8000 Faro
Portugal

UNITED STATES

WIN Publishing
P.O. Box 30338
Stockton
Ca, 95213
U.S.A.

AUSTRALIA

Ed Lomax
2/5 Avondale Street
Clarence Park
S.A. 5034
Australia
Tel. (08) 271-5192

SWEDEN

Sveneric Bogsäter
Duistervoordseweg 27
7391 CA TWELLO
The Netherlands
Tel. 02/55.13.651

GERMANY

Steffen G. Fröhlich
Leiziger Ring 142
63110 Rodgau
Germany
Tel. 061-06-7662
Fax. 061-06-76573

ITALY

Enzo Rossi
Via Venosa
1-20137 MILANO
Italy
Tel. 02/55.13.651

DENMARK

Morten Balle
Vennemindevej 48, 4. th.
2100 København Ø.
Denmark

CZECH REPUBLIC

Luboš Pokorný
Holečkova 31/A-103
150 00 PRAHA 5
Czech Republic
Tel. 02/54 75 46

ISRAEL

Doron Navon
Haprahim - St 3
Kiryat - Shaul
Ramat - Hasharon
Israel 47321
Tel. 03-493-821

NORWAY

Elias Krzywacki
Smågamyrveien 15
4033 Fors
Norway
Tel. 4751 802861

FRANCE

Arnaud Cousergue
7, Villa Raphael
91860 EPINAY s/Sénart
France
Tel. 1.60.47.20.02

ARGENTINA

Daniel Hernández
Avenida Mitre 3233-1605 MUNRO
Buenos Aires
Argentina
Tel. 756-0207

BELGIUM

Benedikt Sas
Nachtegalenstraat 7
2300 Turnhout
Belgium
Tel. 014/41.50.57

GREECE

Kostas Dervenis
Taigetou 6
Kiffisia 14562
Greece

THE NETHERLANDS

Marriette van der Vliet
Duistervoordseweg 27
7391 CA TWELLO
The Netherlands
Tel. 02/55.13.651

CANADA

Edward Brown
Sanmyaku-Canada
P.O. Box 27589
Yorkdale Postal Outlet
Toronto, Ont. M6A-3B8
Canada

IRELAND

Steve Byrne
21 Carrigmore Park
Aylesbury, Tallaght
Dublin 24
Ireland

SPAIN

Pedro Fleitas González
C/Eduardo Dato
9-35200 Telde
Gran Canaria (Canary Islands)
Spain
Tel. (928) 69.43.51
Fax. (928) 68.04.64

編 集 部

〒278 千葉県野田市野田636 TEL: 0471(22)2020

武神館本部道場事務局

編 集 長 林 靖 之

武神館伝書 「山脈」 第七号

平成七年三月一日発行

発行者 初見 良昭

発行所 武神館道場

千葉県野田市野田636 〒278

TEL 0471(22)2020

FAX 0471(23)6227



* 許可なくして複製・転載を禁ず

DAIKOMYOSAI 1995



SEMINAR

Schedule : 30/Nov 10:00am - 05:00pm (Lunch Break = noon - 2:00pm)
01/Dec 10:00am - 05:00pm (Lunch Break = noon - 2:00pm)
02/Dec 10:00am - 03:00pm (Lunch Break = noon - 1:00pm)

Place : Tokyo Budokan
Add: 3-20-1 Ayase, Adachi-ku, Tokyo
Phone: 03-5677-3111

Menu : Naginata, Nagamaki, Daishosabaki Taijutu

Fee : Yen 20,000.- for 3 days
Yen 7,000.- for 1 day

PARTY

Date : 02/Dec (Saturday) 06:00pm -

Place : ROX New Otani
Room "Ho-oh-no-ma (鳳凰の間) "
Add: 1-25-15 Asakusa, Taito-ku, Tokyo
Phone: 03-3836-7777
(See attached map)



Fee : Yen 15,000.-

Note : Those who will attend this party are requested to pay the fee to Soke or Dojo-cho by 15th of November.

Contact : Bujinkan Hombu
636 Noda, Noda-city, Chiba-pref. 278.
Phone: 0471-22-2020
Fax : 0471-23-6227

